

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月28日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520536

研究課題名（和文） 読み書き能力レベル判定試験の開発

研究課題名（英文） Development of the Reading-and-Writing Proficiency Test

研究代表者

村上京子（MURAKAMI KYOKO）

名古屋大学・留学生センター・教授

研究者番号：00210005

研究成果の概要（和文）：工場などで働く就労外国人を対象とした読み書き判定試験を開発した。この試験は、毎日の生活の中で遭遇する読み書きの活動をもとに、内容、問題形式、判定基準を策定していった。読む能力が不十分でも受けることができるように多言語版が用意されている。予備調査 215 名の結果から改訂を行い、本調査 269 名を対象に実施した結果、0.88 以上の高い信頼性係数が得られた。今後、地域支援教室のプレイスメントテストなど広く活用されることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：We developed a Reading-Writing proficiency test for foreign workers in Japan. Contents, problem forms, and assessment standards of the test were designed based on language activities in daily lives. Several versions were made for different language speakers with inadequate reading abilities. The final versions were completed after preliminary tests administered to 215 persons. The relatively high coefficient of reliability, 0.88, was obtained by administering to 269 workers. The test is expected to be widely used as a test for placement in, for example, local institutions supporting foreign workers.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2010年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 2011年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,900,000 | 870,000 | 3,770,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：読み書き能力・試験開発・就労外国人・レベル判定・多言語版・信頼性

1. 研究開始当初の背景

アメリカやヨーロッパを中心に言語教育評価に関して大きなパラダイムシフトが起きている。単なるレベル分け評価から、明確な行動記述による目標基準準拠評価へと変

わってきている。これまで評価の対象とはされてこなかった教室指導を受けていない外国人就労者の言語能力に関しても、ドイツ、オランダなど移民受け入れのための言語テ

ストが開発されるなど、判定試験の開発が最近活発になってきている。

日本においては 1990 年の入国管理法改正に伴い、南米各地から就労を目的とした日系人の渡日がここ 20 年間に増加した。このような外国人は来日直後から工場などで仕事を中心とした生活を送り、教室などで日本語を学習する機会がないまま、20 年近い時間が経過している。日本各地に外国人集住都市と呼ばれる就労外国人が集中して暮らす地域が生まれ、そこでは日本人住民と外国人住民のコミュニケーションが成り立たないまま、多くの問題を抱えている。

特に生活の中で話し言葉はなんとか習得できても、書き言葉に関しては意図的な教育がない限りなかなか身に付かない。就労外国人の中には読み書き能力の向上を願いながらも、学習が継続しないケースも多い。従来の日本語能力を測る試験は日本語で書かれた質問文が読めないと解答できないが、就労外国人の中には問題文を読むことが難しいレベルの人も少なくない。自分の日本語レベルを把握し、適切な学習の場で学習成果を実感しながら学習を進めていく上で、読み書き判定試験は重要である。

2. 研究の目的

ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) に基づき現在各国などで開発されてきている判定試験に関する情報を収集し、日本在住の外国人就労者の読み書きレベル判定試験を開発するのが、本研究の目的である。現在ある日本語試験は学校など教室で日本語を学習している学習者を対象としているため、工場などで就労し周囲とのやり取りを通して主に日本語を身につけてきた就労外国人にはなじまない問題が多い。そこで、問題の内容、形式、判定基準、使用言語などを就労外国人

の実態調査に沿って実施可能なものにしていく必要がある。

3. 研究の方法

(1) レベル判定基準の策定

2007 年度に実施した地域外国人日本語使用実態調査およびヨーロッパ言語共通参照枠組み (CEFR) を参照し、レベル 0 から 6 までの 7 段階の行動記述文によるレベル基準を策定する。

(2) 問題の作成

判定レベルに合う問題を各 20 題レベル別に作成する。

(3) 予備テストの実施

工場などで、就労外国人を対象に実施し、あらかじめ策定した採点基準に沿って採点する。また複数の日本人間で評価が一致しないものについては、その都度協議し、採点基準を精緻化していく。

(4) テストの分析・改定

予備調査で収集したデータの項目分析を行い、識別力の低い項目等を削除、入れ替えを行う。

(5) 判定手引きの作成

最終的に採用した問題を採点基準とともに提示し、試験実施要項を「判定の手引き」の形で公開する。

4. 研究成果

(1) レベル判定基準の策定

2007 年度に実施した地域外国人日本語使用実態調査およびヨーロッパ言語共通参照枠組み (CEFR) を参考に、レベル 0 から 6 までの 7 段階の行動記述文によるレベル表示を作成した。実態調査では、カタカナで書かれた自分の名前が読めない就労外国人は約 10%、カタカナで自分の名前が書けない人が約 20% いることから、CEFR に比べさらに 1 段階増やし、「未習得段階」を設けた。また、実態調査では「名前を書く」「住所を書く」以外

書く能力に関しては使用場面があまり多くないことが分かっていた。そこで、簡単なメッセージやメモ、履歴書や問い合わせ文など生活場面で遭遇する可能性のある場面を集めた。読む能力に関してはさらに実態調査を重ね、日常目に触れることが多く、読めないと生活に支障がでる文字や文を収集した。

(2) テストの開発

この基準に基づき「読み書き能力判定テスト Ver. 1」を開発し、215名の外国人対象者に実施した。結果からテストの信頼性、および各項目の識別度を算出した。信頼性 (α 点数) は読み、書きともに 0.80 以上と高かったが、項目分析の結果識別力のあまり高くない項目があったため問題の差替えを行い、さらに問題数を増やした。いじょうのような、改善を行い、「読み書き能力判定テスト Ver. 2」を作成した。

このテストの特徴は、以下の通りである。

- ① これまで日本語が読めなければ受けることができなかった他の試験の欠点を克服するために、多言語対応にし、受験者が母語で問題の指示等を受けられるようにした。
- ② 試験に含まれる問題内容は、受験者が生活の中で実際に求められる行動を調査し、現実性のあるものとした。
- ③ 実施・採点に当たっては、就労外国人と接触する一般の人々が使用可能なように、ガイドラインを作り、実施マニュアルを作成した。

(3) テストの実施と分析

改訂を行った後、2010年4月から2011年5月までの間に、工場及び地域集会場16か所において、このテストを実施した。対象者は、工場などに就労する外国人269名であった。うち194名(72%)がブラジルにルーツをもつ人で、タイ11%、ペルー7%、台湾、中国と続く。各試験の信頼性 (α 係数) を求めると、読むテスト0.88、書くテスト0.89、合計0.91

と、読むテスト、書くテストともに十分な水準に達していると言える。

各問題項目の識別力もすべて0.40以上と高く、問題が測っている「読む」能力、「書く」能力に関して内的な一貫性があるといえる。また、「書く」問題の採点に当たっては、採点マニュアルに沿ってテスターが採点を行い、後日解答用紙をもとに判定WGにおいて複数のメンバーが確認作業を行っているが、採点結果に不一致が認められることはほとんどなかった。これは採点マニュアルに示されている例示が豊富で、それに沿って採点が行われるためである。

(4) 今後の課題と考察

身に付いた日本語能力を客観的に把握できることは、外国人対象者自身にとって、日本語学習への動機づけとなっていくと考えられる。まずはこのような学習者自身が自律的に日本語学習を進めていく指針として活用されることが期待できる。

さらに地域で外国人日本語学習支援を行っている支援者にとって、これまで熟達レベルを測る適切なものさしがなかった。日本語能力試験の結果や漢字をこれまでに何字勉強したかなどの自己申告でクラス分けを行っていたことが多かったのに対し、生活の中で何ができるのかに即したものさしが提供できたと考える。これによって、クラス分けや学習成果の確認を行うことができる。

今後これまでの実施結果を精査し、さらに精度の高い測定具に改善しているとともに、行動記述文によるレベル表示も受験者自身および企業や就職支援にかかわる人々など広く多くの人にとって、わかりやすいものにしていく必要がある。現在0レベルから4レベルまでの試験が完成しているが、3レベル以上の学習者数があまり多くないため、十分な分析ができていない。今後よりレベルの高

い学習者のデータをさらに収集し、上のレベルの充実を図っていききたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. 村上京子(2012)「就労外国人のための読み書き判定試験の開発」名古屋大学留学生センター紀要 10号、査読有、印刷中
2. 村上京子(2011)「4技能におけるコミュニケーション能力の測定方法の開発」『ヨーロッパ日本語教育』15、査読有、135-143
3. 村上京子(2010)「日本語教育における実証的研究—研究方法と個人差について—」『日本語教育』146号、査読有、90-102
4. 村上京子(2009)「Can-do statements とパフォーマンステストに基づく日本語能力判定基準の策定」『ヨーロッパ日本語教育』14、査読有、148-155

[学会発表] (計3件)

1. 村上京子「就労外国人のための読み書き判定試験の開発」日本語教育国際大会 第10回、2010年8月20日、中国、天津
2. 村上京子「自律的学習支援のためのCan-do-statements コンピュータ版の開発」The 13th International Conference of EAJS、2010年8月26日、Tallinn, Estonia.
3. 村上京子「4技能におけるコミュニケーション能力の測定方法の開発」第15回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム 2010年8月26日 ルーマニア、ブカレスト大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上京子 (MURAKAMI KYOKO)
名古屋大学・留学生センター・教授

研究者番号：00210005

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：